

太田上町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 太田城跡

2022年3月

株式会社槙野ハウジング  
高松市教育委員会

## 例　　言

- 1 本報告書は、太田上町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、太田城跡の調査成果を収録した。
- 2 発掘調査地並びに調査期間は次のとおりである。
- 調査地 高松市太田上町 1129 番地 3
- 発掘調査 令和 3 年 6 月 28 日～7 月 10 日
- 整理作業 令和 3 年 7 月 12 日～令和 4 年 3 月 31 日
- 調査面積 54 m<sup>2</sup>
- 3 発掘調査・整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は株式会社槇野ハウジングが全額負担した。
- 4 発掘調査は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 山元敏裕・佐藤容、同会計年度任用職員 上原ふみが担当した。
- 5 整理作業は山元・佐藤・上原が担当した。
- 6 本報告書の執筆は、第 3 章の第 3 節は山元と佐藤、その他の執筆及び編集は佐藤が担当し、山元・上原が補佐した。
- 7 本調査に関する以下の業務を委託した。  
　遺構測量写真撮影（石組）：株式会社四航コンサルタント
- 8 本報告書の高度値は TP（東京湾平均海面）を基準とし、座標は国土座標第 IV 系（世界測地系）に従った。また、方位は座標北を示す。
- 9 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。  
　SD：溝 SP：柱穴 SK：土坑
- 10 遺構断面の注記の色調及び土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 36 版』を参照した。
- 11 本報告書の挿図として、2 万 5 千分の 1 の高松市都市計画図を一部改変して使用した。
- 12 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。

## 目　　次

### 第 1 章 発掘調査の経緯と経過

第 1 節 発掘調査の経緯	1
第 2 節 確認調査の結果	1
第 3 節 立会調査の結果	1
第 4 節 発掘調査の経過	2
第 5 節 整理作業の経過	3

### 第 2 章 地理的・歴史的環境

第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3

### 第 3 章 調査の概要

第 1 節 調査の方法	5
第 2 節 基本層序	5
第 3 節 遺構と遺物	5

### 第 4 章 総括

## 挿　　図　　目　　次

第 1 図 太田城跡と調査対象地位置図	1
第 2 図 確認調査地位置図	2
第 3 図 立会調査地位置図	2
第 4 図 確認調査平面図	2
第 5 図 太田城跡周辺の遺跡分布図	4
第 6 図 調査対象地位置図	5
第 7 図 遺構配置図	7
第 8 図 遺構断面図	8
第 9 図 石組平・立面図	9

第 10 図 SK1、SK6・19、表層出土遺物実測図	10
第 11 図 表層（黒ブロック層）出土遺物実測図	10
第 12 図 SD2 埋土出土遺物実測図	10
第 13 図 SD1・2 の切合部分出土遺物実測図	11
第 14 図 石組埋土出土遺物実測図	11
第 15 図 石組 1 出土遺物実測図	11
第 16 図 石組 1 出土遺物実測図	12
第 17 図 暗渠水路出土遺物実測図	12

## 表　　目　　次

第 1 表 基準点座標一覧	5
第 2 表 出土遺物観察表 1	15

第 3 表 出土遺物観察表 2	16
第 4 表 出土遺物観察表 3	17

## 写　　真　　目　　次

写真図版 I 調査区西側（石組遺構）／暗渠水路 1 ／暗渠水路 2 ／石組 1 南壁 断面／SK1 完掘	
--	--

写真図版 II SP5・6 ／ SP27 ／調査区東側（ピット完掘）／SD1・2 完掘／A-A' 壁面／B-B' 壁面	
---	--

写真図版 III 出土遺物	
---------------	--

# 第1章 発掘調査の経緯と経過

## 第1節 発掘調査の経緯

高松市太田上町 1129 番地 3 で宅地造成工事が計画された（第1図）。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「太田城跡」の南西端に位置していることから、令和3年4月13日付で事業者から本市教育委員会（以下、市教委）に埋蔵文化財の確認調査依頼が提出された。依頼を受けて、市教委は同年4月19日に確認調査を実施し、事業地内の全域で遺構や遺物を確認した。

その後、事業者から令和3年4月21日付で文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が提出され、市教委から香川県教育委員会（以下、県教委）へ進達したところ、同日付で県教委より工事着手前に私道路設置箇所を発掘調査、擁壁や境界コンクリート設置箇所及び水道管撤去箇所を立会調査で対応するよう行政指導があった。これを受けて事業者と市教委で協議を行い、発掘調査を実施し記録保存を行うこと及び費用面の合意が取れたことから、事業者と業務を管理する高松市、調査・整理作業を管理する市教委の三者で、同年6月1日付で埋蔵文化財調査協定書を締結した。その後、工事日程の変更が生じたことから同年6月15日付で埋蔵文化財調査変更協定書を締結し、「太田上町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。



第1図 太田城跡と調査対象地位置図

(S = 1 / 4000)

## 第2節 確認調査の結果

事業者から依頼を受け、令和3年4月19日に確認調査を実施した。調査では、北側と南側に計2本のトレーナーを設定した（第2図）。基本層序は地表から約0.2～0.3mの深さまで表土（床土）等が堆積し、その下が明褐色極細砂の地山である。

1 トレーナー（南側）は調査対象地の東端から東西方向に設定した。ピットと土坑が数か所で検出され、時期は中世～近世と考えられる。ピットの一つからは陶器片が出土している。

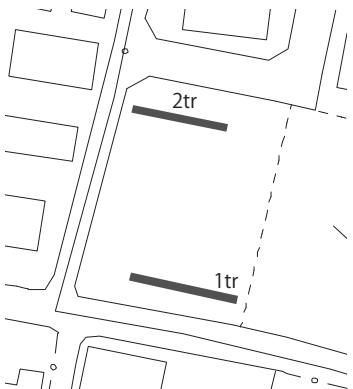
2 トレーナー（北側）は調査対象地の西端から東西方向に設定した。遺構はピットや土坑の他に、西端では南北に伸びる溝と、石や土器片が集まった不明遺構が検出された。ピットからは土器片や金属片、陶器片等が出土し、時期は中世～近世のものと考えられる。西端の溝と不明遺構から遺物は出土していないが、溝の位置は太田城跡の西端に当たり、中世太田城に付随する堀跡である可能性が考えられた。不明遺構はその上部に隣接しており、近世のものと考えられる。

## 第3節 立会調査の結果

県教委からの行政指導により、①令和3年6月9日に水道管撤去箇所、②6月25日、③28日に擁壁設置箇所、④7月28日に境界コンクリート設置箇所の立会調査を実施した（第3図）。

①、④の立会調査では掘削が遺構面まで及ばず、遺構・遺物は確認できなかった。②では、深さ0.35～0.4mのところで遺構面に達し、土坑とピットを確認した。遺物は出土していないが、確認調査で中世～近世の遺構面と同一の層序であり、埋土も同様であることから同時期の遺構と考えられる。

③の立会調査では、深さ約0.4mほど掘削した。南北方向に伸びる溝が確認されたが、これは本発掘調査で見つかったSD2（溝跡）に繋がる位置にあるため同一の遺構と考えられる。遺物は出土していない。

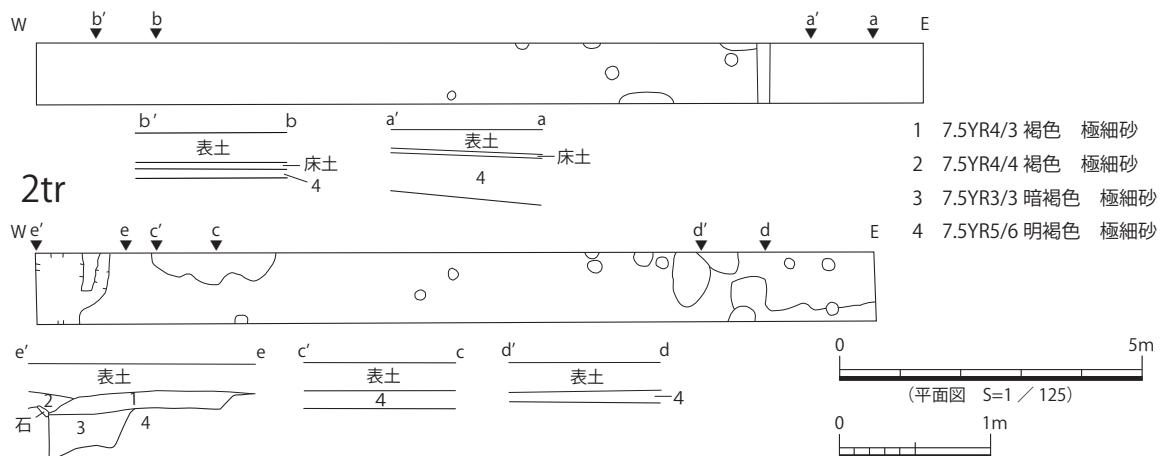


第2図 確認調査地位置図 (S=1/1000)



第3図 立会調査地位置図 (S=1/1000)

1tr



第4図 確認調査平面図

#### 第4節 発掘調査の経緯

発掘調査は令和3年6月28日から開始し、同年7

月10日に埋戻しが完了して、現地での作業は終了した。主な調査経過は下記のとおりである。

6月28日（月）重機で遺構面まで掘削。溝、土坑、ピット等の遺構を検出。

6月29日（火）ピットの断面図を取り、完掘。

6月30日（水）西側の溝部分（中央）で石列のような遺構を検出。

7月1日（木）西側溝の掘削。溝の西端で石組が下まで続いていることを確認。石組の平面図を作成。

7月2日（金）土坑の完掘と西側溝の掘削。西側溝の中央部で石組が方形に並んでおり、また南側でも石が並んでいる様子を確認。

7月4日（日）東側溝、西側溝の掘削。ピット等遺構の平面図を作成。

7月5日（月）東側溝の掘削。西側溝の石組（中央部・南側）の清掃と写真測量。

7月6日（火）東側溝の掘削。西側溝の石組（中央部・南側）の北西隅から暗渠が延びていることが確認され、調査区西側を流れていた水路から水を取り入れていたことが判明。

7月7日（水）西側石組を写真撮影・図面作成のち、順次解体した。暗渠部分の見通し断面図を作成。

7月9日（金）西側石組の断割作業。

7月10日（土）西側石組暗渠の断面図、調査区北側土層図の作成と写真撮影等終了。調査区完掘状況を撮影し、全ての作業を終了。

## 第5節 整理作業の経過

調査終了後、令和3年7月から整理作業を開始した。7月に遺物洗浄を行い、8月～令和4年1月に遺物の接合や実測、遺構のトレース作業を行った。また8月～令和4年2月に順次、原稿の執筆・編集作業を進めていった。なお整理期間中に、石組遺構の写真測量を四航コンサルタントに委託して実施した。

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分を、讃岐平野の一部である高松平野が占める。高松平野は北は瀬戸内海、西は五色台山塊に接し、南の讃岐山地から流れる香東川や春日川、新川等の河川の働きにより形成された扇状地の沖積平野である。これらの河川の流れは高松平野に農耕に適した土壤をもたらしたが、中流域では伏流し地表の流路は涸れ川になることが多く、水不足解消のため早くから多くの溜池が造られた。平野部各地に点在する溜池は、年間1,000ミリ前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。高松平野を流れる諸河川の中でも最大規模の香東川は、平野形成に最も大きな影響を及ぼした。かつては石清尾山山塊の南麓で東西に分かれて河口へ注いでいたが、近世に行われた香東川の改修以降、東側の流路は水田地帯及び市街地の地下に埋没している。なお、17世紀の廃川直前の流路は現在、御坊川として今でもその名残を留めている。

本遺跡は御坊川の東方、高松平野の中央部にあり、南側の多肥地域はとともに旧香東川の伏流水と湧水（出水）が各所にみられる地域である。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡のある太田上町は、近世の太田村に位置し、太田村は現在の太田上町・下町・松縄・伏石に当たる。明治23(1890)年に太田・伏石・松縄・今里・福岡村

が合併して近代の太田村が成立、昭和15(1940)年には高松市に合併し、この時、太田上町と下町に分かれた。古くは、香川郡十二郷の1つとして『和名抄』に「大田郷」の名がみえるが、「大田」の地名は、大和朝廷の直轄領である屯倉を耕作した部曲の民「田部」又は「大田部」が居住していたことに由来するとされる。『讃岐国風土記』に「畑にて沃壤の地なり」とあるように、古くから開けた肥沃な土地だったことが知られ、周辺には太田原高州遺跡や多肥北原遺跡といった遺跡があり、現在の太田、多肥の地域で8世紀の早い時期から条里地割の整備が進んでいたことが分かっている。

#### 縄文時代～古墳時代

本遺跡周辺で知られる最も早い遺跡は縄文時代のもので、居石遺跡（伏石町）の自然流路から縄文晚期の土器等が一括で出土している。弥生時代後期以降になると遺跡の数・規模ともに増加する。

弥生時代前期には、汲仏遺跡（多肥下町）や凹原遺跡（多肥下町）から環濠や住居跡等の集落跡がみられる。後期には更に、太田下・須川遺跡（太田下町）や上天神遺跡（上天神町）、蛙股遺跡（太田下町・伏石町）、居石遺跡で竪穴住居等の集落跡が見つかっており、この周辺一帯に集落が広がっていたことが分かる。

古墳時代中期には太田下・須川遺跡で竪穴建物跡や掘立柱建物跡がみられる。前期には居石遺跡で祭祀道具等が、後期には凹原遺跡で溝が出土している。

#### 古代

古代前半には、太田原高州遺跡で古墳時代終末から継続する竪穴建物跡や掘立柱建物跡、鍛冶炉跡がみられる。後半には、居石遺跡と太田下・須川遺跡の自然流路から10～11世紀の大型加工木や斎串などの祭祀道具が出土したほか、蛙股遺跡で11～12世紀の水田跡が、太田原高州遺跡で古代後期の道跡や掘立柱建物跡が見つかった。

#### 中世～近世

中世前半の遺跡はなく、後半に入ると香西氏の武将佐藤孫七郎の居城である佐藤城跡が知られ、南東のキモンドー遺跡では佐藤城跡の南東隅の堀が検出されている。堀の両側に1～2段の石垣が残り、東西方向の堀では間仕切りの石垣も確認された。

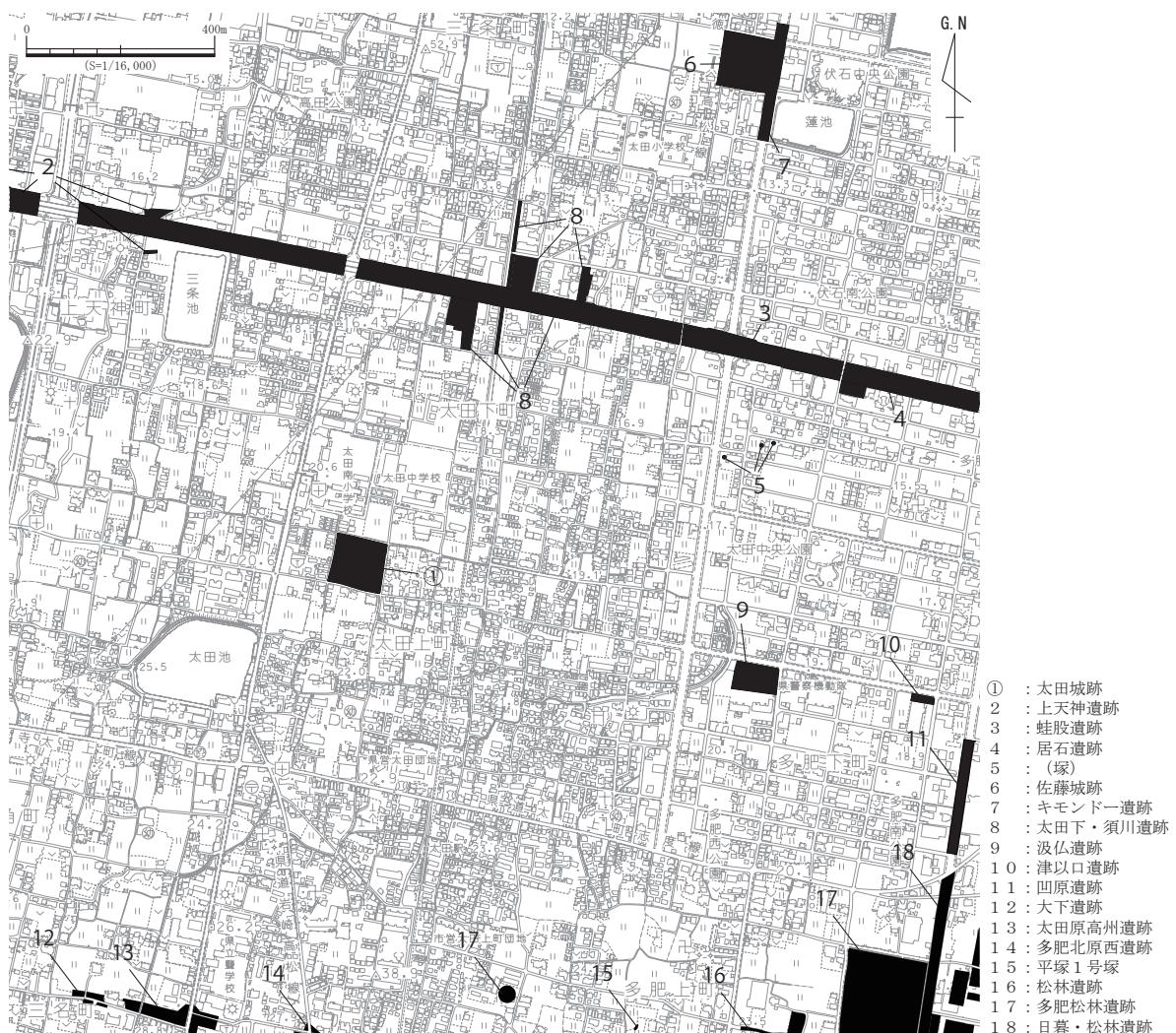
中世の「太田郷」については、嘉元4(1306)年6月12日の『昭慶門院御領目録案』に「太田郷〈廊御方〉」湛増の後裔宮脇兵庫及び弾正の兄弟の屋敷跡があつたとされる。

とあり、龜山院皇子兼良親王の母「廊方」(三条局)が、院分国讃岐国内の所領の一つとして、阿野郡山田郷とともに太田郷を知行されている。南北朝期～戦国期にかけては、鐘や鰐口の銘文に「太田郷」の記載が散見される。最福寺喚鐘(明徳4(1393)年8月3日の日付)に「讃州太田郷最福寺」とあるほか、岡山県妙国寺所蔵の鰐口(永享9(1437)年11月18日の日付)には「讃州香東郡太田郷松直(縄) 権現若一王子」とあり、現在の高松市松縄町付近は、当時太田郷に属していたことが窺える。また、室町時代に細川頼之の推挙により足利義満に仕えた連歌師周阿は太田郷の出であることが知られている。戦国時代には、栗林御林の東方に、太田郷松縄に熊野別当

近世には、キモンドー遺跡で土坑等がみつかっている。近世太田村は、香東郡東太田郷に属し、始めは生駒氏領で寛永19(1642)年以降は高松藩領となる。寛永年間に西島八兵衛により香東川東筋がせき止められ、その川筋上には鹿ノ井・坪井出水・大田井出水等、伏流水や湧水(出水)が多く点在しており、現在もその一部が残っている。

#### 参考文献

- 高松市教育委員会 1996 『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡』  
 高松市教育委員会 1999 『キモンドー遺跡』  
 香川県教育委員会 2014 『太田原高州遺跡1』  
 高松市教育委員会 2021 『太田下・須川遺跡(第5次調査)』  
 角川書店 1985 『角川日本地名大辞典 37 香川県』  
 四国新聞社 1984 『香川県大百科事典』

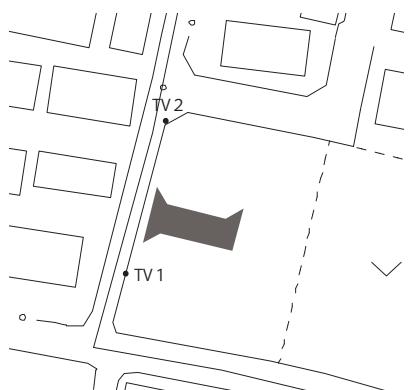


第5図 太田城跡周辺の遺跡分布図 (S = 1/16,000)

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査の方法

発掘調査の対象となったのは、事業地内で私道路設置箇所である（第6図）。掘削は、いずれも基本的には遺構検出面までは重機で掘削したのち、人力による掘下げを行った。測量に関する基準杭は、近隣の既設の基準点からレベル移動して、調査地に隣接する道路脇のベンチマーク（TV1、TV2）を基準点として測量を行った。記録に際しては、現地での遺構平・断面図は1/20で作図した。写真はデジタルカメラで記録した。



第6図 調査対象地位置図 (S = 1/1000)

第1表 基 準 点 座 標 一 覧

	X座標	Y座標	Z座標
TV1	144780.842	50046.913	19.488
TV2	144803.179	50052.241	19.66

### 第2節 基本層序

基本層序は、表土と床土の下に明黄褐色のシルト～極細砂層の地山が水平に堆積している。検出面は地山層の上面で、調査区の西側で溝2条と土坑を、東側で多数のピットを検出した。

### 第3節 遺構と遺物

#### SK 1(第7図、第10図)

SK 1は調査区中央で検出した。SD 2を切る円形の土坑である。また、土坑の底から20cm程掘り

下げたところで径10cm程度の細礫が多量に見られた。

出土遺物は灯明皿の黒色土器A類と考えられる土師器の皿(1)が出土したが、SD 2との切合い関係から、SD 2の埋没(様相2～3(1620～1650年))後に造成されたと考えられる(松本和彦氏による編年。以下陶磁器の編年はこれによる。(香川県埋蔵文化財センター2003))。

#### SP 1～26(第7図、第10図)

調査区の東側で検出した。ピットは埋土の違いによって、①黒褐色(SP 4、6、18、21)、②褐色(SP 8、11、13、15、16、17、22、24)、③灰褐色(SP 1、2、3、5、7、9、10、14、19、23)の3種類に分類できる。種類ごとに埋没した時期が異なり、SP 5とSP 6の切合いから①の方が③よりも古く、SP 2とSD 2の切合いから③はSD 2よりも新しいと考えられる。ただし調査範囲が狭く、ピットの並びは判断できなかった。

また出土遺物は、SP 6から弥生土器高杯の脚部(1)が出土したほか、石がSP 3、SP16、SP19から出土した。石は何れもピットの底近くから出たが、根石として敷かれたものか、埋没に伴う混入かどうかは不明である。SP 3とSP16の石は自然石で、SP19の石(3)は丸く、一部摩耗した加工痕が見られる。出土遺物が殆ど無く時代が特定しづらいが、①は弥生時代の可能性が考えられ、②は不明、③はSD 2の埋没より後と考えられる。

#### 表層(黒ブロック層)(第11図)

調査区の表層からは、弥生土器の壺(4)、土師器の碗(5)が出土した。また、SD 1の埋土表層の黒ブロックを含む土層からは弥生土器高杯の口縁端部(6・7)、底部(8・9)、須恵器高台付杯(10)、土師器擂鉢(11)、陶器の碗底部や甕(12～14)が出土しており、弥生～中世にかけての遺物が混入していたことから、土を周辺地域から持ち込んだ際に混入したと推測される。現在、太田城跡の近隣で確認されている遺跡は少ないが、もともと太田城跡周辺にはこれらの時期の遺跡が多くあった可能性が考えられる。

#### SD 1・2(第7図、第16・17図)

調査区の西側で検出した。西側をSD 1、東側をSD 2とする。SD 1に重複して検出した石組によっ

て大半が切られているが、SD 2 に並行する溝と想定される。SD 1・2 の前後関係については、両溝の上部を覆っていた黒色ブロックを含む暗褐色細砂～極細砂層によって平面で確認ができず、唯一調査区北端の土層観察において、SD 2 が切っていることを確認した。

SD 1 は唯一確認できた北壁土層及び周辺部の状況からは V 字状を呈する。遺構の規模は幅 1.5 m、深さ 0.55 m である。土層は、4 層に分層できる。最下層では、地山を含む極細砂であるが、それより上はシルト質極細砂である。土層堆積状況からは、徐々に埋没したものと想定される。出土遺物は認められなかった。

SD 2 は土層観察から SD 1 を切る溝で、断面形状は緩やかな皿状を呈する。遺構の規模は幅 2.8 ～ 3.0 m、深さ 0.4 m である。土層埋土は断面作成箇所により異なるが 2 ～ 4 層の堆積を確認した。北壁及び南壁の土層では、下層付近を中心に地山ブロックを多量に含む層が認められることから、溝廃絶後、短期間に埋め戻された可能性が想定される。出土遺物は、須恵器皿(15)、同捏鉢(16)、土師器羽釜(17)(19)、同捏鉢(18)、陶器皿(20・21)、同碗(22)、加工円盤(23)、備前焼擂鉢(24)、陶器鉢(25)、磁器皿(26)、同碗(27)、石鏸(28)、打製石斧(29)が出土している。(30) から(32) は SD 1・2 の切り合い部分からの出土遺物である。(30) は土師器焙烙、(31) は陶器の鉢、(32) は備前焼擂鉢、(33) は丸瓦である。これらの出土遺物について、SD 1 からは出土遺物が無いことから SD 2 の出土遺物である可能性が高い。

### 石組遺構（溜井）（第 9 図、第 12 ～ 15 図）

SD 1 に重複して検出された平面形が方形状を呈する（石組 1）と長方形状を呈する（石組 2）の 2 つの石組遺構である。いずれの石組も北西部分に暗渠の排水口がある。

石組 1 は内側の平面形が方形状を呈し、調査区西端中央部において検出した。構築状況から 4 壁同時に構築されているのではなく、まず西壁が構築され、その後、南壁→東壁→北壁の順に構築されていることがわかる。平面での内法は南北 1.4 m、東西 1.3 m で東西がやや狭い。各壁によって状況が異なる。

西壁の石積が最も残存状況が良い。西壁は高さ 0.45 m、川原石を最大で 5 段斜め上方へ積み上げている、基礎石となる一段目は同じ高さの石材を揃えているが、2 段目以上は、高さを揃える部分も一部認められるが、一定ではない。裏栗は直径 5 cm 程度の川原石を幅 0.1 m 程度入れている。

南壁は高さ 0.25 m、最も残りの良い部分で 3 段である。東壁との接合部を越えた東端では、底からの高さが 0.4 m となり、本来は同様の高さであったと想定される。西壁ほど石材の規模は揃っていないが、高さを揃えながら積まれている。南壁の石積みは垂直に積み上げられ、裏栗は、幅 0.5 m を検出した。裏栗の石材の規模は、一辺が 5 ～ 10 cm のものが中心であるが、それを超える規模の石材も多く認められる。

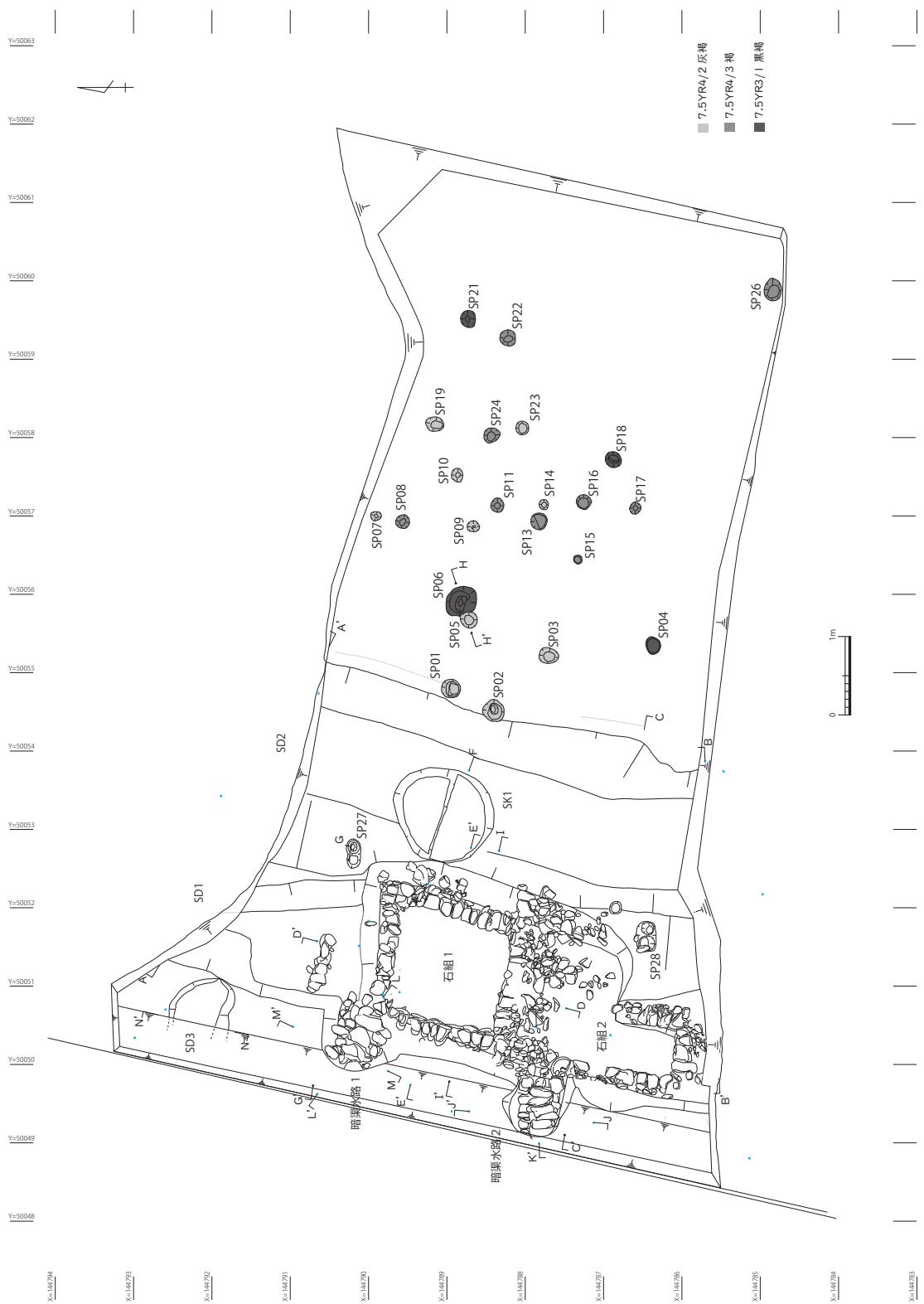
東壁は高さ 0.2 m、最も残りの良い部分で 3 段である。南壁と同様に石材の規模は揃っておらず、高さの違う規模の石材を組み合わせて積んでいる。裏栗は、他の壁と異なり、石積みに使用している石材と同様な規模の石材が認められる。

北壁は高さ 0.25 m、最も残りの良い部分で 2 段である。使用している石材は、最も不揃いである。裏栗は認められず、シルト質極細砂で充填されている。図面等を作成していないことから、正確な位置等は不明であるが、写真等での確認から石組 1 の北西隅より北側で東西方向の集石を確認している。調査時に並び等は認められなかったことから除去し、その下には、石積み等は認められなかったことから、原位置からは遊離しているが、位置関係から北壁の石積みを構成していた石材の可能性が考えられる。

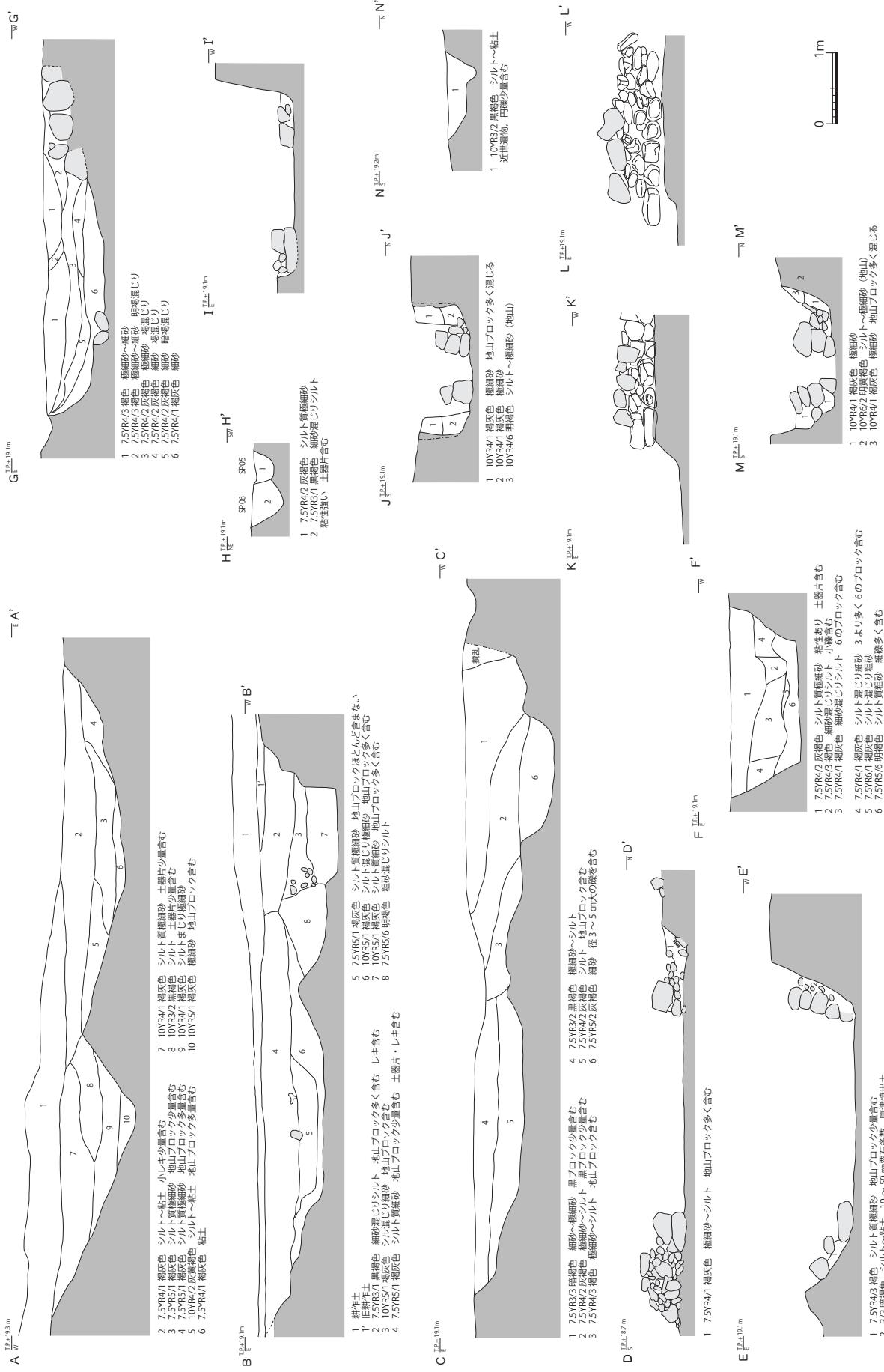
石組 1 の 0.8 m 北側で長さ 0.7 m の規模で東西に並ぶ石列を検出した。石列は 1 段のみで、石列の西側から 3 石目の下から鉄製鍬先(52) が出土した。位置関係から石組 1 に伴うと想定されるが、北壁の石積みの底場と石列の底場には 0.15 m の段差がある。

石組 1 の掘方の規模は、やや不整形ながら南北 3.4 m、東西 2.3 m である。東壁石積み設置部分より東側は傾斜しており、南壁の東端付近の石組の傾斜は、掘方の傾斜に影響を受けている。暗渠水路 1 は、石組 1 の北西部で検出した水路である。長さ 1.4 m、幅 0.2 m、水路内の高さ 0.25 m である。石組 1 に接する部分を除き、石材を小口積みに 3 段程度積み上げ、蓋にした石材を両壁に架ける。暗渠水路の底場と石組 1 の底場

第7図 遺構配置図 (S = 1/80)

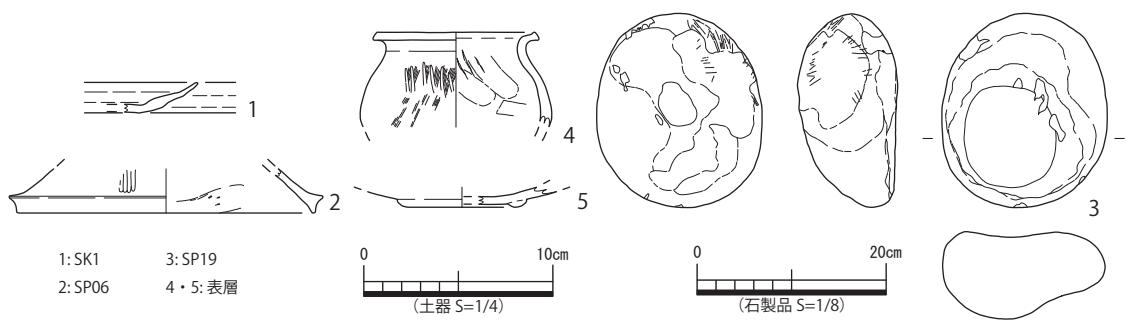


## 第8図 遺構断面図 (S = 1/80)

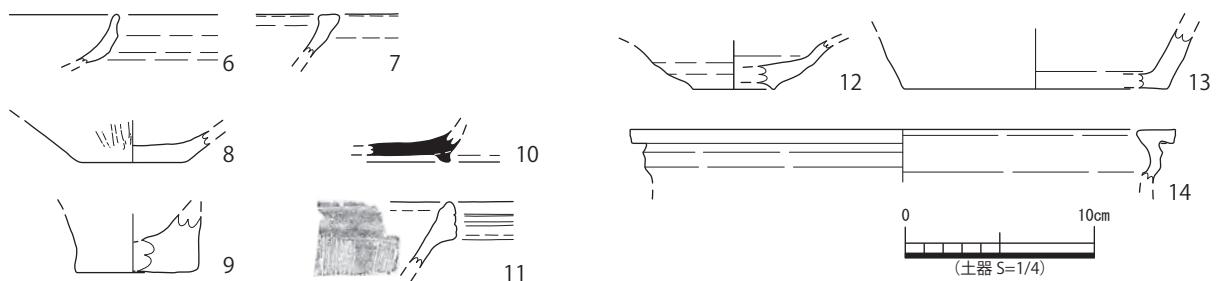




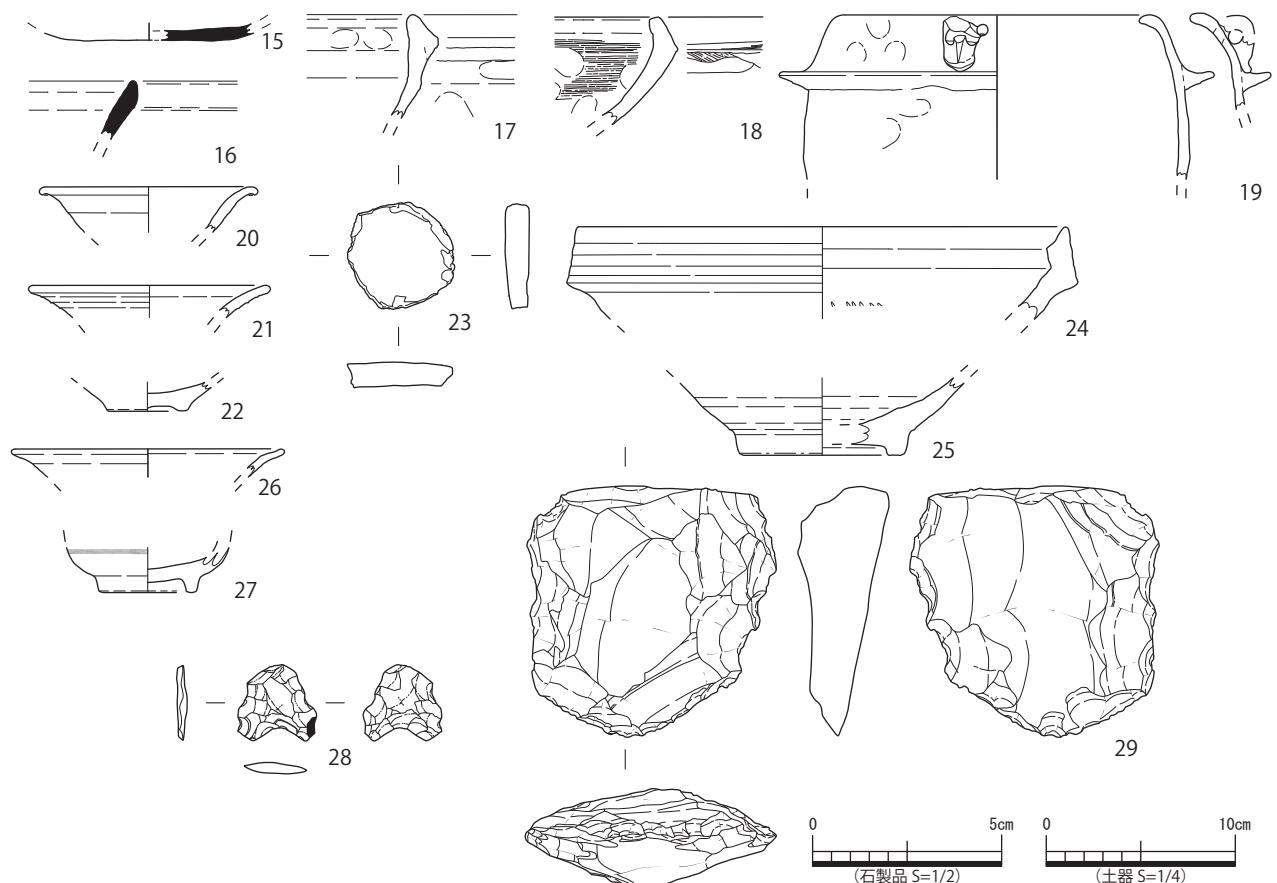
第9図 石組平・立面図 ( $S = 1/50$ )



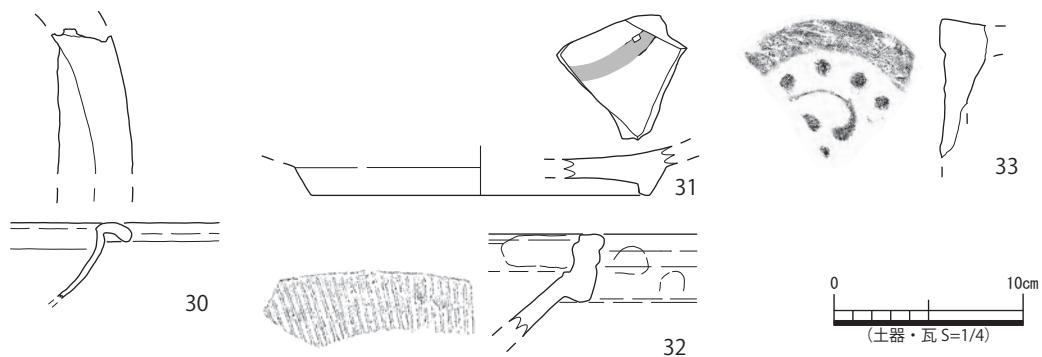
第10図 SK1、SP6・19、表層出土遺物実測図



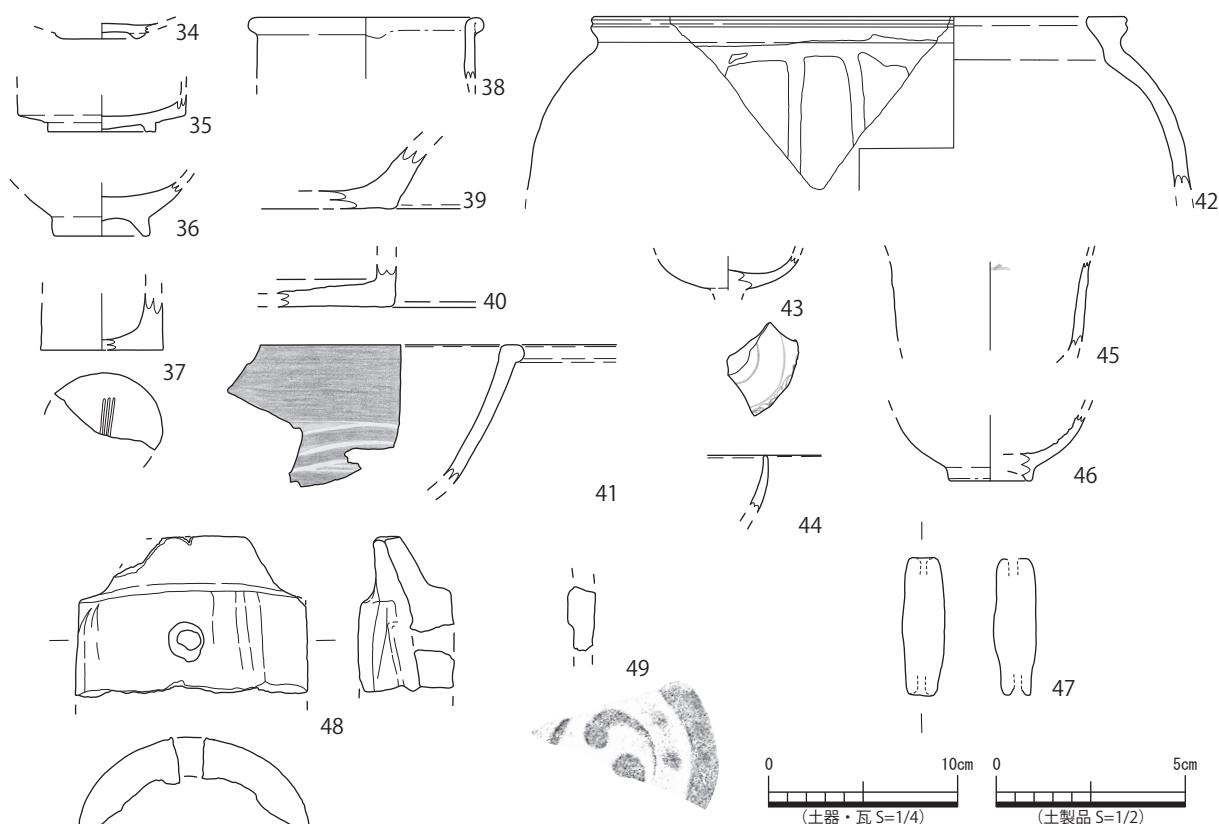
第11図 表層（黒ブロック層）出土遺物実測図



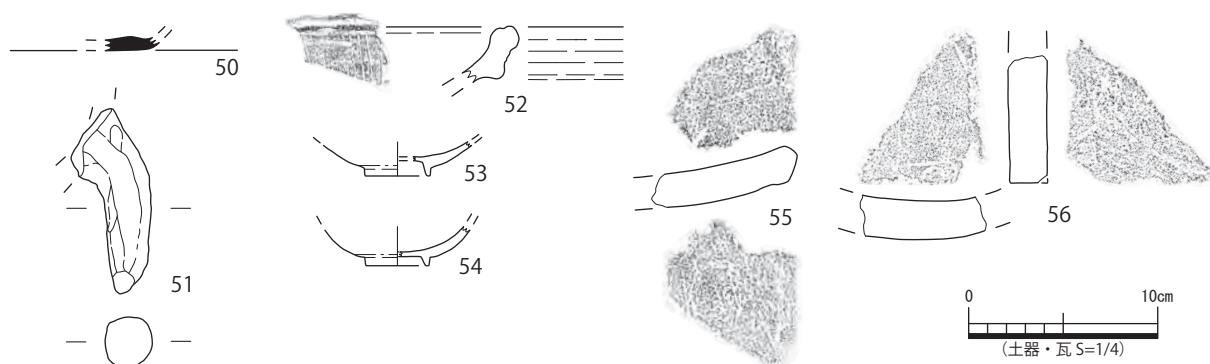
第12図 SD2 埋土出土遺物実測図



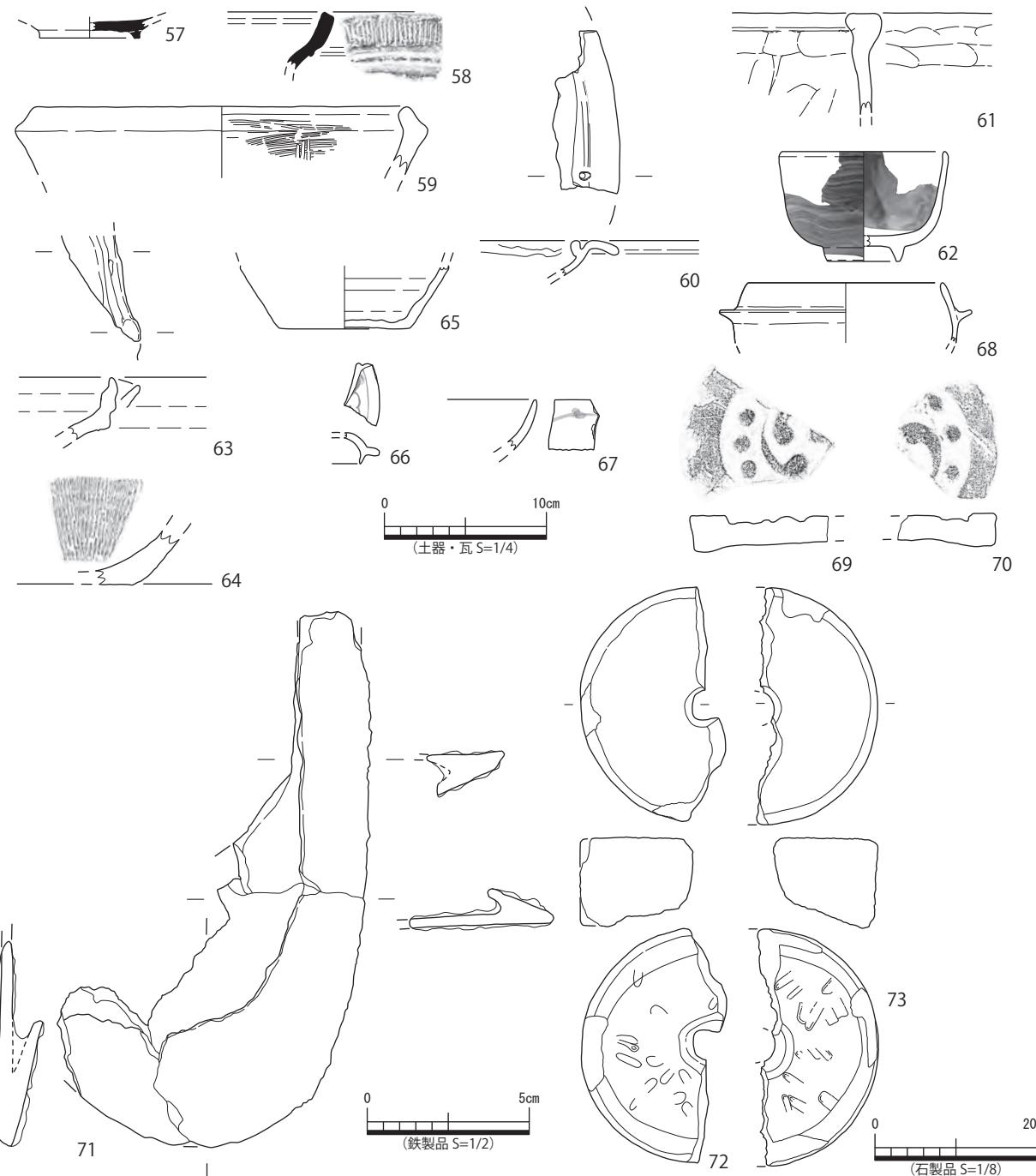
第13図 SD1・2の切合部分出土遺物実測図



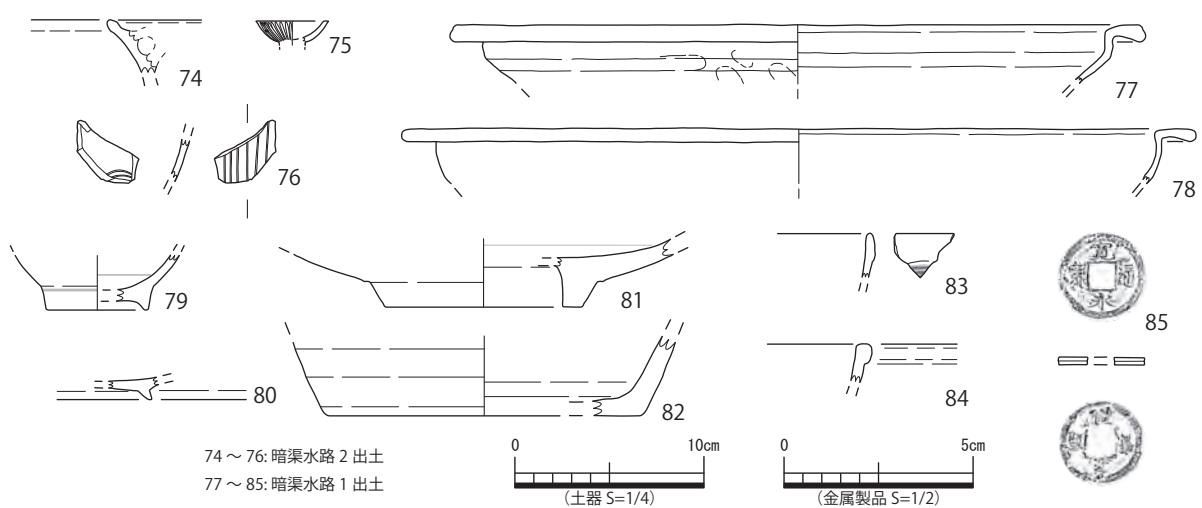
第14図 石組埋土出土遺物実測図



第15図 石組1出土遺物実測図



第16図 石組1出土遺物実測図



第17図 暗渠水路出土遺物実測図

の差は 0.05 m である。

石組 2 は、石組 1 の南側で検出した長方形形状を呈する。西壁、南壁、東壁を検出したが、北壁のみ未確認である。内法は東西 0.6 m、南北 1.5 m 以上である。

西壁は長さ 1.5 m、西壁北端では、石臼を 2 段に積んでいる状況を確認した。石材は小口積みしているものが多く石積みの高さは 0.2 m である。裏栗は、幅 0.1 m で一辺 10 cm 程度の石材が認められる。

南壁は、最も残りの良い部分で 2 段の石積みが認められ、高さが 0.2 m である。使用している石材の規模にばらつきがある。裏栗は、幅 0.2 m で一辺が 0.1 m の石材が認められる。

東壁は長さ 0.8 m が残存する。使用している石材の規模も不揃いである。石積みは一部 2 段を確認しているが、使用している石材が小振りであるためである。裏栗は幅 0.1 m 程度で、一辺が 5 cm 程度の石材を使用している。

暗渠水路 2 は、石組 2 の北西で確認した水路である。長さ 1.0 m、幅 20 cm、高さ 0.25 m である。石組 2 に接する部分を除き小口積みの石材を 2 段積みにし、両壁の天端に石材を架けて蓋石とする。暗渠水路の底場と石組 2 の底場との差は 0.15 m である。

石組の埋土出土遺物は、土師器椀 (34)、陶器碗底部 (35・36)、備前壺？ (37)、陶器 (唐津) 壺 (38)、陶器甕 (39)、陶器建水 (40)、陶器鉢 (41)、同甕 (42)、磁器小椀 (43)、同碗 (44)、同猪口 (45)、同壺 (46)、管状土錘 (47)、丸瓦 (48)、軒丸瓦 (49) が出土している。

石組 1 の石組内部裏栗出土遺物は、須恵器杯 (50)、土師器足釜 (51)、陶器擂鉢 (52)、陶器碗 (53) (54)、平瓦 (55・56)、須恵器碗 (57)、同甕 (58)、土師器擂鉢 (59)、同焙烙 (60)、同炭入れ壺 (61)、陶器 (唐津) 碗 (62)、備前擂鉢 (63・64)、磁器蓋 (66)、同碗 (67)、瓦質土器足釜 (68)、軒丸瓦 (69) (70)、鉄製鍬先 (71)、石製石臼 (72・73) である。

暗渠水路出土遺物は、暗渠水路 2 から土師器羽釜 (74)、磁器紅猪口 (75)、磁器碗 (76)、暗渠水路 1 から土師器焙烙 (77・78)、陶器碗 (79・80)、同甕 (81)、同底部 (82)、陶器天目碗 (83)、陶器口縁部 (84)、貨幣 (寛永通宝) (85) である。

### SD 3 (第 7 図)

調査区北西隅で検出した。SD 1 に接続する溝である。西側は現用水路の掘方に切られて不明である。断面形状は南側が緩やかで北側が深くなる。検出長は 0.5 m、幅 0.6 m、深さ 0.2 m である。土層埋土は黒褐色シルト～粘土の単層である。遺物は出土していない。

### SP27、28 (第 7 図)

SD 1・2 の底面に近い高さで SP27、28 を検出した。場所は石組 1・2 の東側に当たり、石組遺構の外郭に沿うように並ぶ。

## 第 4 章 総括

### 弥生時代

#### SP 4、6、18、21

調査区東側で検出した多数のピットの内、黒褐色の埋土を伴う S P 4、6、18、21 からは弥生土器が出土しており、弥生時代以前の時期である可能性が考えられる。なお、調査範囲が狭くピットの並びは判断できなかったため性格等の詳細は不明である。

### 近世以前

#### SD 1・2

調査区西端で南北に延びる SD 1 と、その東側に隣接する SD 2 を検出した。SD 1・2 は同じ機能として使用されていたと考えられるが、埋土の切合いから埋没時期にはズレがあり、SD 1 → SD 2 の順に埋没したと考えられる。SD 1 は遺物を検出していないため時代の特定はできない。SD 2 については、埋土から肥前系陶器や瀬戸・美濃系陶器が出土していることから、使用時期は下っても様相 2～3 (1620～1650 年) の 17 世紀前半までと推測される。

なお、本調査区の北側で確認調査、南側で立会調査を実施している。調査範囲が狭く詳細は不明だが、SD 1 は北へ延び、SD 2 は南に延びる状況が確認されている。調査区は太田城跡の南西端に位置するため、SD 1 と SD 2 は中世太田城に伴う堀であったと推測される。

## 近世～近代

### 石組遺構（溜井）

SD 1 内で方形区画の石組と、そこから西へ延びる暗渠水路 2 本を検出した。石組は 1 と 2 に分けられ、各区画から西に暗渠水路が延びる。壁面の観察から、SD 2 の埋没後に造成されたことが分かる。

暗渠水路等の形成時期は、石組から唐津刷毛目碗やキラ粉の軒丸瓦が出土しているため様相 5（18 世紀前半）以降と考えられる（渡邊 2017）。また、暗渠水路や石組の埋土から端反腕や紅猪口が出土しているため様相 7～8（18 世紀第 4 四半期～1872 年）の頃が埋没時期と考えられる。

こうした方形の石組遺構は、栗林公園の動物園跡地内でも検出されている。溝のような落込みの廃棄後、その中に構築されており、深さ 1 m で中央部に湧水がある。遺構の位置は、「栗林分間図」（安政 7 年（1824））の「藪・畑」に当たり、これらを維持管理するための農業用水施設と位置付けられている。本調査で検出した暗渠水路を伴う石組も、こうした水の流れのある灌漑施設だったと想定できる。現在も本調査地の南東側の地域には、皿井出水<sup>註1</sup>を含め数か所の出水が残ることから、古くから水源に恵まれた場所だったと考えられる。

石の積み方の観察から、①まず石組 1 の西壁と 2 本の暗渠水路が造成され、②その後の改修で南壁→東壁→北壁の順に造られ方形区画の形ができたと考えられる。また石組 2 は、断定はできないが、①の時期に形成されて②の改修に伴い石積みが崩された可能性もある。

①の時期には暗渠水路が 2 本とも機能していたと考えられ、暗渠水路 2 の位置が高く暗渠水路 1 は低いため、南から北に向かって水が出入りする流れがあったと推測される。②の時期には石組 1 の南壁が造られるため、暗渠水路 2 が継続して使われていたかどうかは不明である。ただし、石組 1 南壁の裏栗には小振りな石材が積まれていることから、暗渠水路 1 から入ってきた水を濾す機能があった可能性も考えられる。

### SK 1

SD 2 の上面で SK1 を検出した。SD 2 の埋没時期である様相 2～3（1620～1650 年）よりも後に造成されたことが分かるが、時代を特定できる遺物は出土しておらず詳細は不明である。

### S P 27, 28

石組遺構に沿う位置で、SD 1・2 の底面近くで SP27, 28 を検出した。恐らく水場の上に屋根等の建物が設置されていたものと推測される。

### S P 1, 2, 3, 5, 7, 9, 10, 14, 19, 23

調査区東側で検出したピットの内、灰褐色の埋土を伴う S P 1, 2, 3, 5, 7, 9, 10, 14, 19, 23 については、S P 4, 6, 18, 21 や SD 2 の上から掘り込まれており、これより新しいものと判断できるため時期は様相 3（1640～1650 年）より後に掘られたと考えられる。なお、ピットの並びは判断できなかった。

## まとめ

太田城については不明な点が多いが、『全譜史』に「太田村に在り 太田犬養（六郎と称す）之に居りき。其の子兼久あり。其の子に兼氏ありき。」とあり、太田犬養氏を城主とする平地の居城であったことが知られており、現在も「シロアト」という地名が残る。

本調査では、中世太田城の関連遺構としては近世以前の溝（堀跡）を検出した。SD 1 の埋没時期は不明だが、恐らく太田城の廃絶時期もこの頃と推測できる。また近世～近代にかけて同じ場所に水場の構築・改修が行われ、その東側の土地も長期にわたり何らかの形で使われ続けた状況が窺える。

これまで太田城跡内外で実施された調査では、北端で中世の柱穴と南北溝、近世～近代と推定される水路跡、その水路脇で近世の埋甕が検出されており（高教文振第 619 号平成 19 年 12 月 3 日）、本調査成果と同様、太田城廃絶後も土地利用が継続していた様子が窺える。

註1.『新撰岐国風土記』（松岡調／未完）には、当該地の字名である「皿井」という泉が掲載されている。

## 参考文献

- 香川県教育委員会 2003 『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』  
香川県埋蔵文化財センター 2003 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（西の丸町地区）III 第 1 分冊』  
香川県埋蔵文化財センター 2006 『栗林公園東門周辺再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 栗林公園』  
渡邊誠 2017 「四国における近世瓦の生産と流通—高松藩における御用瓦師の成立—」『幕藩体制下の瓦』第 66 回埋蔵文化財研究集会  
中山城山 1972 『復刻譜岐叢書（第一）国譜 全譜史』藤田書店

第2表 出土遺物観察表1

報告書番号	出土遺構 / 層位	種別器種	法量(cm/g)	手法の特徴[外]/[内]	色調[外]/[内] 胎土 焼成	備考
1	SK1	土師器 灯明皿	口径:~ 底径:~ 器高:[1.6]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10YR7/2にぶい黄橙 [内]10YR4/1褐灰 普:3mm以下の長石・赤色粒を含む良	黒色土器A類か
2	SP06	弥生土器 高杯脚部	口径:~ 底径:(15.8) 器高:[2.4]	[外]ナデ 回転ナデ ミガキ [内]ヘラケズリか	[外]7.5YR6/4にぶい橙 [内]7.5YR6/3にぶい褐 普:4mm以下の石英・長石・金雲母・角閃石・赤色粒を含む良	
3	SP19	石製品 砥石?	長さ:20.6 幅:1.2 厚さ:9.2 重量:4.700			
4	表層	弥生土器 壺	口径:(8.4) 底径:~ 器高:[5.0]	[外]ナデ ハケ後ミガキか [内]ナデ 絞り目 指頭圧後指頭ナデ、ヘラケズリ	[外]7.5YR6/4にぶい褐 [内]7.5YR5/3にぶい褐 普:2mm以下の石英・長石・金雲母を含む良	弥生時代後期 体部から短く外反する口縁部(A)
5	表層	土師器 碗	口径:~ 底径:(5.6) 器高:[11.0]	[外]ナデ [内]ナデ	[外]5YR7/4にぶい橙 [内]5YR8/3浅橙 普:2mm以下の白色粒を含む良	
6	表層 (黒ブロック層)	弥生土器 高杯(口縁端部)	口径:~ 底径:~ 器高:[2.6]	[外]ナデ [内]マツツ	[外]7.5YR5/6明褐 [内]7.5YR5/6明褐 普:5mm以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒を含む良	
7	表層 (黒ブロック層)	弥生土器 高杯(口縁端部)	口径:~ 底径:~ 器高:[2.3]	[外] [内]	[外]5YR5/6赤褐 [内]10YR4/2灰黃褐 普:3mm以下の石英・長石を含む良	
8	表層 (黒ブロック層)	弥生土器 底部	口径:~ 底径:5.3 器高:[2.2]	[外]ナデ ミガキ [内]ナデ	[外]7.5YR5/4にぶい褐~6/4にぶい褐 [内]5YR5/6明赤褐 普:2mm以下の石英・長石・雲母・黑色粒・赤色粒を含む良	黒斑有
9	表層 (黒ブロック層)	弥生土器 壺?底部	口径:~ 底径:6.8 器高:[3.1]	[外]ナデ [内]ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む良	黒斑有
10	表層 (黒ブロック層)	須恵器 台付杯	口径:~ 底径:~ 器高:[1.7]	[外]回転ナデ ナデ [内]回転ナデ	[外]10YR6/4にぶい黄橙~8/3浅黄橙 [内]7.5YR6/6橙 粗:2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む良	貼付高台
11	表層 (黒ブロック層)	土師器 擂鉢	口径:~ 底径:~ 器高:[3.5]	[外]回転ナデ 回線2条 [内]回転ナデ 鉗目	[外]10YR7/4にぶい黄橙 [内]10YR7/4にぶい黄橙 普:1mm以下の石英を含む良	拓本有
12	表層 (黒ブロック層)	陶器 碗底部	口径:~ 底径:(4.4) 器高:[2.6]	[外]回転ナデ 回転ヘラナデ [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]2.5Y6/2灰黃 細	内面に重ね焼き痕有
13	表層 (黒ブロック層)	陶器 (備前)壺or壺	口径:~ 底径:(14.0) 器高:[3.2]	[外]回転ナデ ナデ [内]釉溶着のため不明	[釉調]透明釉 [胎土]N5/灰 細	報告書番号63と同一個体か
14	表層 (黒ブロック層)	陶器 壺	口径:(18.8) 底径:~ 器高:[2.8]	[外]回転ナデ 施釉 [内]回転ナデ 施釉	[釉調]7.5YR4/2灰褐 [胎土]7.5YR5/2灰褐 細	砂粒が入っていないので信楽ではなく、肥前か
15	SD2 埋土 (ペルトC-C'北側)	須恵器 皿(底部)	口径:~ 底径:(8.0) 器高:[0.9]	[外]回転ナデ [内]ヘラ切	[外]N7/灰白 [内]5Y7/1灰白 普:1mm以下の石英・長石を含む良	
16	SD2 埋土 (北端付近 埋土)	須恵器 擂鉢	口径:~ 底径:~ 器高:[2.8]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y4/1灰 [内]7.5YR7/1明褐灰 普:5mm以下の石英・長石を含む良	東播系須恵器 口辺部外面に重ね焼き痕有
17	SD2 埋土 (北端付近 埋土)	土師器 羽釜	口径:~ 底径:~ 器高:[5.4]	[外]ヨコナデ 指頭圧 [内]ヨコナデ 指頭圧	[外]10YR8/2灰白 [内]10YR8/2灰白 普:3mm以下の石英・長石・赤色粒・雲母を含む良	新しい様相(15~16C 鋼部の退化)の羽釜(川津元結木遺跡と同時期か) 鋼部下位焼化
18	SD 埋土 (北端付近 埋土)	土師器 擂鉢	口径:~ 底径:~ 器高:[5.7]	[外]ナデ ハケ ハケ後ナデ [内]ヨコナデ ハケ 指頭圧	[外]10YR8/3浅黄橙 [内]10YR8/3浅黄橙 普:4mm以下の石英・雲母・赤色粒を含む良	
19	SD2 埋土 (南壁)	土師器 羽釜	口径:(16.0) 底径:~ 器高:[8.7]	[外]ヨコナデ 指頭圧 [内]ヨコナデ	[外]10YR3/1黒褐 [内]10YR3/1褐灰 普:4mm以下の石英・長石・雲母を含む良	鋸部下位焼化 把手破損後、穿孔して再利用 外面から穿孔
20	SD2 埋土 (ペルトC-C'北側)	陶器・瀬戸美濃皿	口径:(11.0) 底径:~ 器高:[2.4]	[外]施釉 [内]施釉	[釉調]2.5Y7/2灰黃 [胎土]7.5YR8/1灰白 細	様相1~2
21	SD2 埋土 (ペルトC-C'北側)	陶器(肥前)皿	口径:(12.4) 底径:~ 器高:[1.7]	[外]施釉 回転ナデ [内]施釉	[釉調]7.5YR6/2灰褐 [胎土]5YR7/3にぶい橙 細	灰釉
22	SD2 埋土 (南側埋土)	陶器 碗?	口径:~ 底径:4.2 器高:[1.5]	[外]回転ナデ [内]施釉	[釉調]7.5YR8/1灰白 [胎土]7.5YR7/2明褐灰 細	内面に重ね焼き痕 近世初頭(17C頭)の肥前系陶器
23	SD2 埋土 (ペルトC-C'南側)	陶器 体部片(二次加工)?	長さ:5.6 幅:5.6 厚さ:1.4 重さ:55.3	[外]ナデ [内]ナデ	[釉調]~ [胎土]2.5YR7/1明赤灰 細	
24	SD2 埋土 (ペルトC-C'北側)	陶器(備前)擂鉢	口径:(12.8) 底径:~ 器高:[4.9]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ 鉗目	[釉調]自然釉 [胎土]10YR8/1灰白 細	重ね焼き痕有
25	SD2 埋土 (ペルトC-C'北側)	陶器 鉢	口径:(8.3) 底径:~ 器高:[4.1]	[外]回転ヘラケズリ [内]施釉	[釉調]7.5YR8/1灰白 [胎土]5YR7/3にぶい橙 細	肥前系陶器 灰釉 様相3以前
26	SD2 埋土 (北端付近 埋土)	磁器 皿	口径:(14.1) 底径:~ 器高:[1.5]	[外]施釉 [内]施釉	[釉調]7.5Y6/1灰 [胎土]2.5Y7/1灰白 細	肥前系陶器 17C初頭に一時に見られた溝線皿 か 様相3以前
27	SD2 埋土 (ペルトC-C'南側)	磁器 碗	口径:(5.1) 底径:~ 器高:[2.4]	[外]施釉 染付 ナデ [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]N8/灰白 [須]濃青色 微	高台盤付けに砂付着 肥前系磁器 盤付けに重ね焼き痕有
28	SD2 埋土 (北端付近 埋土)	石製品 石鏡	長さ:2.0 幅:2.1 厚さ:0.3 重量:1.4			凹基式
29	SD2 埋土 (ペルトC-C'北側)	石製品 打製石斧	長さ:6.7 幅:6.6 厚さ:2.6 重さ:105.9			

第3表 出土遺物観察表2

報告書番号	出土遺構 / 層位	種別 器種	法量(cm/g)	手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
30	SD1・2 切合い部分	土師器 培塿	口径:- 底径:- 器高:[4.0]	[外]ナデ [内]ナデ	[外]7.5YR4/2灰褐色 [内]10YR7/3にぶい黄橙 普:2mm以下の石英・長石・雲母を含む 良	銅部下位焼化
31	SD1・2 切合い部分	陶器 碗(天目碗)	口径:- 底径:[17.8] 器高:[2.6]	[外]施釉(部分的に露胎) 回転ナデ 底部:ヘラケズリ [内]施釉	[釉調]外7.5YR7/1赤黒 [内]2.5YR4/3にぶい赤褐色/透明釉 [胎土]10YR7/2にぶい黄橙 細-	
32	SD1・2 切合い部分	陶器(備前) 壺鉢	口径:- 底径:- 器高:[5.4]	[外]ヨコナデ 指頭圧 [内]ヨコナデ 卸目 指頭圧	[釉調]自然釉 [胎土]5YR4/1褐灰色 普:	
33	SD1・2 切合い部分	瓦 軒丸	長辺:[2.4] 瓦当径:[7.3] 瓦当厚:[1.5]	[凹]三文巴:右巻 珠文 マツリ [凸]マツメ	[凹]7.5Y/1灰白 [凸]7.5Y/1灰白 [断面]7.5Y/1 3mm以下の石英・長石・赤色土を含む 良	巴の尾が長い 大田城の建物に使われていたか 珠文:径約1cm
34	石組埋土 (SD1 北側)	土師器 椀	口径:- 底径:3.6 器高:[0.8]	[外]マツメ 貼付け窓台 [内]マツメ	[外]5YR7/1明褐色 [内]5YR7/4にぶい橙 普:2mm以下の石英・褐色土を含む 良	西村産
35	石組埋土 (ベルトG-C'南側)	陶器 碗	口径:- 底径:5.7 器高:[1.9]	[外]施釉 回転ナデ 重ね焼痕 [内]施釉	[釉調]土灰釉 [胎土]10YR8/2灰白 普:	
36	石組埋土 (SD1 石組精査時 ベルト北側)	陶器 底部	口径:- 底径:5.0 器高:[2.8]	[外]施釉 [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]2.5YR8/4淡黄色 細:	肥前京焼風陶器(江戸時代初期頃)
37	石組埋土 (SD1 石組精査時 ベルト北側)	陶器(備前) 底部	口径:- 底径:[6.4] 器高:[3.0]	[外]ヨコナデ 底部:ナデ・糊目 [内]ヨコナデ	[釉調]自然釉 [胎土]2.5YR5/2灰赤 普:	
38	石組埋土 (ベルトG-G' 除去)	陶器(唐津) 壺	口径:[12.4] 底径:- 器高:[3.2]	[外]泥塗後施釉 施釉 [内]施釉	[釉調]铁釉 [胎土]2.5YR5/6明赤褐色 細:	口縁部に折り曲げ痕有
39	石組埋土 (ベルトG-G' 南側)	陶器 甕	口径:- 底径:- 器高:[3.3]	[外]施釉 一部マツメ [内]施釉 砂粒溶着	[釉調]外面:土灰釉 里面:透明釉 [胎土]10YR7/3にぶい黄橙 細:	
40	石組埋土 (ベルトG-G' 南側)	陶器(明石) 壺 建水	口径:- 底径:- 器高:[2.3]	[外]回転ナデ 底部:切り離し後指頭圧 [内]回転ナデ	[釉調]- [胎土]2.5YR6/4にぶい橙 細:	
41	石組埋土 (ベルトG-G' 南側)	陶器 鉢	口径:- 底径:- 器高:[7.4]	[外]施釉 回転ナデ 白色化粧土 [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]2.5Y/6/明黄褐色 普:	
42	石組埋土 (SD1)	陶器 甕	口径:[28.2] 底径:- 器高:[9.2]	[外]施釉 [内]施釉		
43	石組埋土 (ベルトG-G' 除去)	磁器 小碗	口径:- 底径:- 器高:[1.8]	[外]施釉 染付 園錐 [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]N8/灰白 微:	瀬戸美濃系磁器
44	石組埋土 (SD1 北側)	磁器 碗	口径:- 底径:- 器高:[2.9]	[外]施釉 [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]N8/灰白 微:	
45	石組埋土 (ベルトG-G' 南側)	磁器 猪口	口径:- 底径:- 器高:[4.7]	[外]施釉 [内]染付 施釉	[釉調]透明釉 [胎土]N8/灰白 [奥須]淡青色 微:	口縁部が反る 株相7以降 石組の埋没期か
46	石組埋土 (ベルトG-G' 除去)	磁器 壺	口径:- 底径:[4.3] 器高:[3.4]	[外]施釉 無胎 [内]ロクロの痕跡	[釉調]透明釉 [胎土]N8/灰白 微:	
47	石組埋土 (ベルトG-G' 除去)	土製品 土鍾	長さ:3.6 幅:1.1 厚さ:1.1 重さ:5.4	[外]ナデ [内]-	[外]10YR8/2灰白・10YR3/3暗褐色 [内]- 普:石英を含む 良	孔が貫通するか
48	石組埋土 (ベルトG-G' 南側)	瓦 丸瓦	長辺:[8.5] 広端幅(短辺):12.3 男瓦厚:2.1	[外]ナデ ヘラケズリ 布目 [内]ナデ 板ナデ	[凹]7.5Y/1灰 [凸]N4/灰 [断面]2.5Y/8/1灰白 密良	釘孔1ヶ所有
49	石組埋土 (SD1 北側)	瓦 軒丸	長辺:[6.2] 広端幅(短辺):[2.5] 瓦当径:[10.0] 瓦当厚:1.5	[外]連珠三巴文(左巻) [内]指頭圧後ナデ	[凹]N6/灰 [凸]N5/灰 [断面]N6/灰 密:	
50	石組1 石組内部裏栗 (東西断割)	須恵器 杯	口径:- 底径:- 器高:[0.75]	[外]底部:板目痕・火襷有 [内]ナデ 回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 精良:砂粒を殆ど含まない 良	
51	石組1 石組内部裏栗 (北東隅 石組除去)	土師器 脚部	口径:- 底径:- 器高:[9.5]	[外]ナデ [内]-	[外]7.5YR7/4にぶい橙 [内]- 普:3mm以下の石英・長石・赤色土を含む 良	
52	石組1 石組内部裏栗 (北東隅 石組除去)	陶器(明石) 壺 擂鉢	口径:- 底径:- 器高:[3.0]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ 卸目	[釉調]- [胎土]2.5YR6/6橙 細:	備前焼模倣して明石や壺で独自に 発達するものに類似する
53	石組1 石組内部裏栗 (南西隅 石組除去)	陶器 碗	口径:- 底径:[3.4] 器高:[1.8]	[外]施釉 高舌:露胎 [内]施釉	[釉調]5Y8/2灰白 [胎土]N6/灰 細:	
54	石組1 石組内部裏栗 (東西断割)	磁器 碗	口径:- 底径:[3.3] 器高:[2.1]	[外]施釉 高舌:露胎 [内]施釉	[釉調]7.5Y/7/2灰白 [胎土]7.5Y/8/1灰白 微:	
55	石組1 石組内部裏栗 (南西隅 石組除去)	瓦 平瓦	長辺:[5.5] 広端幅(短辺):- 狭端幅:- 女瓦厚:1.8	[凹]ナデ [凸]板ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 普:2mm以下の石英・長石・黒色土を含む 良	
56	石組1 石組内部裏栗 (南西隅 石組除去)	瓦 平瓦	長辺:[8.7] 広端幅(短辺):- 狭端幅:- 女瓦厚:2.0	[凹]ナデ 工具痕か [凸]ナデ	7.5YR7/6橙 普:3mm以下の石英・長石・黒色土・雲母・角閃石を含む 良	
57	石組1 石組内部裏栗 (北西部 石組除去)	須恵器 椀	口径:- 底径:[6.2] 器高:[1.3]	[外]貼付輪高台 回転ナデ [内]ミガキ	[外]貼付輪高台 回転ナデ [内]ミガキ	
58	石組1 石組内部裏栗 (北西部 石組除去)	須恵器 壺or甕	口径:- 底径:- 器高:[3.5]	[外]櫛描直線文 ヨコナデ [内]ヨコナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:2mm以下の石英・長石を含む 良	

第4表 出土遺物観察表3

報告書番号	出土遺構 / 層位	種別 器種	法量(cm/g)	手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
59	石組1 石組内部裏葉 (北西隅 石組精査)	土師器 擂鉢	口径:(22.9) 底径:- 器高:[4.2]	[外]ナデ [内]ナデ 横方向のハケ ハケの後部目	[外]10YR8/2灰白～10YR7/2(ぶい)黄橙 [内]10YR5/2灰黄褐 普:1mm以下の石英・長石・金雲母を含む 良好	外面下半に黒斑有 口縁端部内面にも同様の黒斑か
60	石組1 石組内部裏葉	土師器 焙烙	口径:(34.0) 底径:- 器高:[2.2]	[外]ナデ [内]ヨコナデ 指頭圧 ナデ	[外]5YR3/1黒褐 [内]5YR4/1褐灰 普:3mm以下の石英・長石・雲母を含む 良好	鉢部下位に焼付着 内面口縁部に貫通していない内耳孔有
61	石組1 石組内部裏葉 (北西部 石組除去)	土師器 炭入れ壺	口径:- 底径:- 器高:[6.3]	[外]横方向のナデ 横方向の指頭ナデ ナデ [内]横方向のナデ 横方向の指頭ナデ 継方向のナデ	[外]7.5YR8/3浅黄橙 [内]10YR8/1灰白 普:1mm以下の石英・長石を含む 良好	接合痕有
62	石組1 石組内部裏葉 (北西部 石組除去)	陶器(唐津) 碗	口径:(10.0) 底径:(4.5) 器高:6.8	[外]柳刷毛目 施釉 [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]褐色 [文様]灰白・褐灰 細:-	刷毛目唐津 株相5
63	石組1 石組内部裏葉 (北西部 石組除去)	陶器(備前) 鉢	口径:- 底径:- 器高:[3.8]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[釉調]自然釉 [胎土]赤褐色 細:-	重ね焼き痕有
64	石組1 石組内部裏葉	陶器(備前) 擂鉢	口径:- 底径:- 器高:[3.3]	[外]回転ナデ 底部・回転ヘラケズリ [内]節目	[釉調]自然釉 [胎土]2.5YR5/2灰赤 細:-	西側の石組の裏込めか
65	石組1 石組内部裏葉 (北西部 石組除去)	陶器(備前) 壺底部	口径:- 底径:(8.0) 器高:[3.9]	[外]回転ナデ 底部・ナデ [内]回転ナデ	[釉調]自然釉 [胎土]10YR5/1褐灰 細:-	石組年代の基礎資料 内面底部に強いナデ
66	石組1 石組内部裏葉 (北西部 石組除去)	磁器 蓋口縁部?	口径:- 底径:- 器高:[1.9]	[外]施釉 染付 口辺部・露胎 [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]N7/灰白 [具須]暗青色 微:-	
67	石組1 石組内部裏葉 (北西部 石組除去)	磁器 碗	口径:- 底径:- 器高:[3.1]	[外]施釉 染付 [内]施釉	[釉調]透明釉 [胎土]N7/灰白 [具須]淡青色 微:-	肥前系磁器
68	石組1 石組内部裏葉 (北西部 石組除去)	瓦質土器 足釜	口径:(12.0) 底径:- 器高:[3.7]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ後ナデ	[外]2.5Y5/1黄灰 [内]2.5Y6/1黄灰 普:2mm以下の石英・長石・褐色粒を含む 良	
69	石組1 石組内部裏葉 (北西部 石組除去)	瓦 軒丸	長径:(14.0) 広端幅(短辺):- 狭端幅:- 厚さ:0.7	[瓦当]連珠三巴文(左巻) [瓦当裏面]ナデ	N4/灰 普:2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む 良	瓦当:キラ粉付着 株相5新(近世中期)以降
70	石組1 石組内部裏葉	瓦 軒丸	瓦当径:- 瓦当厚:[2.0]	[瓦当面]連珠巴文(左巻) [瓦当裏面]ナデ 指頭圧後ナデ [側面]ナデ	N3/暗灰 普:1mm以下の石英・長石・雲母を含む 良	技法:接合式 瓦当:キラ粉有
71	石組1 石組内部裏葉 (SD1の底)	鉄製品 鍔先	長さ:[16.6] 幅:[9.7] 厚さ:1.4 重量:126.0	-	-	
72	石組1 石組内部裏葉 (石臼上)	石製品 石臼(下臼)	長さ:28.9 幅:[10.0] 厚さ:11.0 重量:5,800			
73	石組1 石組内部裏葉 (石臼下)	石製品 石臼(下臼)	長さ:29.3 幅:[15.0] 厚さ:11.0 重量:5,200			
74	暗渠水路2	土師器 羽釜(吊手)	口径:- 底径:- 器高:[2.8]	[外]ナデ [内]ナデ 指頭圧 ハケ	[釉調]透明釉 [胎土]N8/灰白 普:2mm以下の石英・長石を含む 良	
75	暗渠水路2	磁器 紅猪口	口径:(3.8) 底径:- 器高:[1.3]	[外]無釉(一部に釉付着) [内]施釉(口辺部まで)	[釉調]透明釉 [胎土]N8/灰白 微:-	型押し(型打ち)成形 V期 株相7以降 南側暗渠水路の埋没時期か
76	暗渠水路2 (石組精査)	磁器 碗	口径:- 底径:- 器高:[2.2]	[外]線刻細蓮弁文 施釉 [内]圈線 施釉	[釉調]2.5GY7/1明オリーブ灰 [胎土]2.5GY/1灰白 細:-	青磁模倣
77	暗渠水路1	土師器 焙烙	口径:(36.0) 底径:- 器高:[3.1]	[外]ヨコナデ、指頭ナデ、指頭圧 [内]ヨコナデ	[外]10YR5/1褐灰 [内]10YR5/1褐灰 普:1mm以下の石英・長石・雲母を含む 良	
78	暗渠水路1	土師器 焙烙	口径:(42.0) 底径:- 器高:[2.9]	[外]ヨコナデ [内]ヨコナデ	[外]10YR4/2灰黄褐 [内]10YR5/1褐灰 普:2mm以下の石英・長石・雲母を含む 良	鉢部下位焼化
79	暗渠水路1	陶器 碗	口径:- 底径:(5.4) 器高:[2.9]	[外]回転ナデ 施釉 露胎 底部・回転ヘラケズリ [内]回転ナデ 施釉	[釉調]5Y7/2灰白 [胎土]10YR8/2灰白 [文様]淡青色 細:-	肥前系陶器 株相6～7 北側暗渠水路の埋没時期か
80	暗渠水路1	陶器(綠釉) 碗	口径:- 底径:- 器高:[1.2]	[外]施釉 底部・回転ヘラケズリ [内]施釉	[釉調]10Y6/2オリーブ灰 [胎土]N6/灰 細:-	平安京近郊系
81	暗渠水路1	陶器(唐津) 皿	口径:- 底径:(10.5) 器高:[3.6]	[外]回転ナデ 施釉 露胎 底部・回転ヘラケズリ [内]回転ナデ 施釉	[釉調]10YR6/2灰黄褐 [胎土]2.5YR5/4(ぶい)赤褐 [文様]白色 細:-	
82	暗渠水路1	陶器(備前) 鉢or壺or壺	口径:- 底径:(16.4) 器高:[4.2]	[外]ヨコナデ [内]ヨコナデ	[釉調]自然釉 [胎土]10YR7/1灰白 細:-	報告書番号13と同一個体か
83	暗渠水路1	陶器 碗(天目碗)	口径:- 底径:- 器高:[2.3]	[外]回転ナデ 施釉 露胎 底部・回転ヘラケズリ [内]回転ナデ 施釉	[釉調]2.5Y7/2灰黄 [胎土]7.5YR8/1灰白 [文様]10YR2/2黒褐 細:-	肥前系陶器、腰錦碗 株相6以降
84	暗渠水路1	陶器 口縁部	口径:- 底径:- 器高:[2.0]	[外]回転ナデ [内]回転ナデ	[釉調]2.5Y4/2灰褐 [胎土]10YR7/1灰白 細:-	
85	暗渠水路1	錢 寛永通宝	長さ:2.3 幅:2.3 厚さ:0.2 重量:3.5	[外]- [内]-	[外]- [内]-	2枚の銭が重なっており、両面に「寛永通宝」の刻が見られる



調査区西側（石組遺構）（上空から、上が西）



暗渠水路1（東から）



暗渠水路2（東から）



石組1 南壁 断面（東から）



SK1 完掘（北から）

写真図版  
II



SP 5・6 (北西から)



SP27 (南から)



調査区東側（ピット完掘）（西から）



SD 1・2 完掘（北から）



A-A' 壁面（南から）



B-B' 壁面（北から）

[写真図版  
III]



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	おおたじょうあと							
書名	太田城跡							
副書名	太田上町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高松市教育委員会							
シリーズ番号	第227集							
編著者名	山元 敏裕、佐藤 容、上原 ふみ							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
太田城跡	香川県 高松市 太田上町	37201	10887	34° 18' 15"	134° 02' 37"	2021.6.28 ～2021.7.10	54m <sup>2</sup>	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
太田城跡	城館跡	弥生時代 近世以前～近代		溝、石組遺構、 ピット、土坑		土師器、須恵 器、陶器、磁 器、石臼、鉄製 品		
要約	<p>今回の調査では主に近世以前から近代までの遺構を検出した。調査地は太田城跡の南西隅に位置する。調査区の西側では南北の溝2条と土坑を、東側では弥生時代から近世以降までの時期が混在する多数のピットを検出した。</p> <p>溝2条はもとは中世太田城に伴う堀として利用されていたと考えられ、埋没時期については、東側溝は17世紀前半（様相2～3：1620～1650年）、西側溝はそれより前と考えられる。また西側溝内では、2本の暗渠水路を伴う石組を検出した。東側溝の埋没後、18世紀前半以降に造成され、周辺の環境から、近世後期～近代（様相7～8：18世紀第4四半期～1872年）に埋没するまで水場として使用されたと考えられる。土坑は東側溝の埋没後の造成である。</p> <p>堀の埋没後、近代にかけて水場等の改修が繰り返し行われ、太田城の廃絶後も土地利用が継続していた状況が窺える。</p>							

太田上町宅地造成工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

## 太田城跡

令和4年3月31日

編集 高松市教育委員会  
 高松市番町一丁目8番15号  
 発行 株式会社楳野ハウジング・高松市教育委員会  
 印刷 有限会社中央ファイリング